

# 「月」に何を思う ― 漱石句の月と漢詩の月 ―

屋敷 信晴

夏目漱石が小説だけでなく、俳句や漢詩に親しんでいたことはよく知られている。例えば『明暗』執筆中に毎日漢詩を作っていたといい、俳句についても一高在学中から生涯の友正岡子規の手ほどきをうけ、来熊後には五高の学生であった寺田寅彦らと「紫溟吟社」というグループを作って指導したりしている。その熊本で詠んだ俳句の中に次の句がある。

酒なくて詩なくて月の静かさよ

この句の背景には、白居易の漢詩が存在するという指摘がある。そこでこのコラムでは、中国の古典詩（漢詩）に見られる月のイメージを確認し、それがどのような形でこの漱石の句に関わっているのか確認したい。



月を詠んだ漢詩は数多いが、その中でもよく知られたものの一つが白居易「八月十五日夜禁中独直对月憶元九」（八月十五日夜禁中に独り直し 月に対して元九を憶ふ）であろう。

銀臺金闕夕沈沈 銀臺金闕夕べ沈沈

独宿相思在翰林 独宿 相思ひて翰林に在り

三五夜中新月色 三五夜中 新月の色

二千里外故人心 二千里外 故人の心

渚宮東面煙波冷 渚宮 東面 煙波 冷やかに

浴殿西頭鐘漏深 浴殿 西頭 鐘漏 深し

猶恐清光不同見 猶ほ恐る 清光 同に見ざるを

江陵卑湿足秋陰 江陵は卑湿にして秋陰 足おほからん

この詩で最も有名なのは傍線部「三五夜中 新月の色 二千里外 故人の心」の部分であろう。三五は掛け算して十五、つまり「三五夜」とは十五夜のことである。この詩が作られた旧暦八月十五日はいわゆる仲秋の明月であり、古来親しい人々が集って満月を眺めて楽しむ日とされている。「新月」とは月の満ち欠けの新月のことではなく、空にのぼったばかりのまっさらな月のこと。白居易は十五夜の空に浮かんだ真っ白い満月を眺めつつ、遠く南方に左遷された親友元稹も今頃この月のように潔白な心を抱きつつ月を眺めているだろうか、と思いを馳せるのである。この詩の背景にあるのは、月は世界に一つしか存在しない、だからどれだけ離れていても同時に眺め、共有することができるという性質、言い換えれば月の「超空間性」である。この詩ではその超空間性が、遠く離れた地において会えない親友への友情に繋がっているのである。



月の超空間性が繋がるのは友情だけではない。例えば、同じくよく知られた月を詠んだ詩に李白「静夜思」がある。

牀前看月光 牀前 月光を見る  
疑是地上霜 疑ふらくは是 地上の霜かと  
挙頭望山月 頭を挙げて山月を望み  
低頭思故郷 頭を低れて故郷を思ふ

時は秋の夜。寝台で横になつていた李白はまぶしさにはつと目を覚ます。目の前は一面の銀世界。びつしりと霜が降りているのかと思つた李白は、それが満月の光で床が白く輝いて見えているのだと気づき、その光の源である月を見上げる。しかし次の瞬間、押し寄せる故郷への思いにうつつむいてしまふ。さていかに満月の明るい光であつたとして、李白はなぜ目を覚ましたのか。それは恐らく熟睡できていなかったから。なぜ熟睡できなかったのか。漢詩の世界では、人が眠れないのは何か心配事や憂いのためであることが多い。李白も恐らくそうだつたのだろう。その憂いは故郷に繋がるものであつたようで、思はず月を目にして遠い故郷のことが頭に浮かんでしまつた李白はうつつむくのであつた。この詩の背景にあるのも月の超空間性であると言えよう。ただしこの詩では月の超空間性が遠く離れた故郷への思い、いわゆる望郷の心情に繋がっている。



また李白は別の詩「把酒問天」（酒を把りて天に問ふ）では次のように言う。

青天有月来幾時	青天 月有りてより 来 幾時ぞ
我今停杯一問之	我 今 杯を停めて 一たび之に問ふ
人攀明月不可得	人は明月を攀ること得べからず
月行却与人相随	月行 却つて人と相隨ふ
皎如飛鏡臨丹闕	皎として飛鏡の丹闕に臨むが如く
綠煙滅尽清輝發	綠煙 滅え尽きて 清輝 發す
但見宵從海上來	但だ見る 宵に海上より来るを
寧知曉向雲間沒	寧ぞ知らん 曉に雲間に向かひて没するを
白兔搗藥秋復春	白兔 葉を搗ぎて 秋 復た春
姮娥孤棲与誰隣	姮娥 孤棲して誰とか隣する
今人不見古時月	今人は見ず 古時の月
今月曾經照古人	今月は曾經て古人を照らせり
古人今人若流水	古人今人 流水の若し
共看明月皆如此	共に明月を見る 皆此の如し
惟願當歌對酒時	惟だ願ふ 歌に当たり酒に対する時
月光長照金樽裏	月光の長く金樽の裏を照らさんこと

この詩の傍線部で李白は、今の人は時を溯つて昔の月を見ることはできない、この月がかつて昔の人を照らしていたそのものであるというのに。昔の人と今の人は流れる水のように溯れないものであるが、しかしともに同じ月を眺めるのだ、という。月は世界に一つしかないが、さらに言えば昔から未来に渡つて、一つしかない、つまり「超時間性」も持っている。今見ている月を古人も見たとだろろうし、未来の人も見るはずである。また先に見た望郷の詩でも、今自分がいる場所と故郷を繋ぐという超空間性と同時に、今月を見ている自分とかつて故郷で月を見ていた自分を繋ぐという、超時間性も作用していると言えるだろう。つまり月には、見る者の思いを時間と空間を飛び越えた遙か彼方へと飛ばし、現在位置と接続する機能があると考えられる。



ここまで月の超空間性と超時間性について見てきた。それに関わって、もう一つ紹介したい漢詩がある。杜甫「月夜」である。

今夜鄜州月	今夜鄜州の月
閨中只独看	閨中 只だ独り看る
遥怜小儿女	遥かに憐れむ小儿女の
未解憶长安	未だ長安を憶ふを解せざるを
香霧雲鬢湿	香霧 雲鬢湿ひ
清輝玉臂寒	清輝 玉臂寒し
何時倚虚幌	何れの時か虚幌に倚りて
双照涙痕乾	双び照らされて涙痕 乾かん

この詩が作られたのも恐らく旧暦八月十五日である。この時杜甫は安祿山の軍によって長安に軟禁され、妻子とは離ればなれであった。一句目の「鄜州」は妻子を疎開させている場所、二句目の「閨」とは女性の寝室のこと。杜甫は眼前の長安の月を直接詠むのではなく、月を媒介として遠く鄜州の空に浮かんでいる月、そしてそれを眺める妻を想像しているのである。杜甫の脳裏に浮かぶ妻の姿は、香しい霧に髪の毛が湿るほどの長時間窓を開け放ち、頬杖をついて露わになった前腕が清らかな月の光に寒々しく照らされているという美しい姿である。杜甫は長安の月を見ながら、その月を媒介として空間を飛び越え、同じく月を眺めている美しい妻の姿を幻視しているのである。

それだけではない。杜甫は今離ればなれの二人をそれぞれ照らしている月も、いつかは二人揃った姿を照らして欲しいと願う。そこには離ればなれの今と二人揃った未来、その両方を照らす今と未来の月という、時間を超えて存在する月の姿が存在する。つまりこの詩では、月の超空間性と超時間性の両方がうまく結びつきながら、杜甫の妻への愛情に繋がっているのである。



さてここまで、漢詩に見える月には超空間性と超時間性があり、そしてそれが友情や望郷、愛情などの表現に繋がる例について確認してきた。最後にいよいよ白居易の詩、そして夏目漱石の句に言及したい。まず白居易「寄殷協律」（殷協律に寄す）である。

五歳優遊同過日	五歳優遊して同に日を過 <small>すご</small> し
一朝消散似浮雲	一朝消散して浮雲に似たり
琴詩酒伴皆拋我	琴詩酒の伴 皆我を拋 <small>なげ</small> ち
雪月花時最憶君	雪月花の時 最も君を憶ふ
幾度聽鷄歌白日	幾度か鷄を聴きて白日を歌ひ
亦曾騎馬詠紅裙	亦た曾て馬に騎りて紅裙を詠ず
吳娘暮雨蕭蕭曲	吳娘暮雨 蕭蕭の曲
自別江南更不聞	江南に別れてより更に聞かず

この詩は洛陽にいる白居易が、以前の江南地方で勤務していた頃の生活を振り返りながら、当時属官であった殷協律（殷は姓、協律は官職名、名は未詳）に贈った詩である。漱石が踏まえていると思

われるのはこの詩の傍線部、「かつて琴や詩、酒と一緒に楽しんだ友はもういなくなってしまうた、雪、月、そして花の時という自然の景物が美しい時、ともに見た君のことが思い出される。」という部分である。この部分は遠く離れた地の友人に追憶を語っているという点で、ここまで確認してきた月の超空間性と超時間性が関わっているとと言える。さらに言えば、月だけでなく冬の雪、秋の月、春の花(梅)というそれぞれの季節を代表する美しい景物を「白」という潔白なイメージの色を共通点として取り合わせることによって、秋だけでなく一年中いつも一緒に自然の美を楽しんでいたという、深く清らかな友情のイメージを増幅するという白居易の表現上の工夫は特筆すべきだろう。



最後にいよいよ本題の漱石の句である。もう一度挙げておこう。

酒なくて詩なくて月の静かさよ

ここまで述べてきたような漢詩の月の持つ超空間性と超時間性、そこから生まれる友情や望郷といったイメージを踏まえつつ漱石がこの句を詠んだのだとすれば、そこにはどのようなイメージが込められているのか。今まで確認してきた漢詩的な文脈で言うならば、この句に詠まれているのは友と楽しむべき酒も詩も無い、ただあるのは帰れぬ故郷や会えぬ友人を思わせる月ばかり、というものの寂しい情景である。「静かさ」という言葉も、或いは李白の「静夜思」を踏まえているとするならば、やはり寂しいイメージを強化していることになる。

「酒なくて詩なくて」というのは、やはり白居易の詩を踏まえて、それらが無いだけではなく、それらと一緒に楽しむべき友もいないということまで含んでいると考えてよいだろう。しかしその結果感じられる「月の静かさ」は、漢詩的なマイナスの感情ではなくより日本的なしみじみとした情趣、例えば『枕草子』で「月のころはさらなり」と言われるような情感によったもののように思われる。その点では、漱石とは時代がずいぶん離れてしまいが、かつて阿倍仲麻呂が詠んだ和歌「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」の句に出てくる月が、「かつてふるさとで見た月」という、超空間性と超時間性から来る漢詩の月の望郷のイメージをそのまま用いているのとは異なるように感じられる。漱石のこの句は、漢詩における月のイメージを踏まえつつも、そこにさらに日本的な情感をプラスして俳句という文脈の中に再生させたものだ、というように読み過ぎであろうか。



以上、中国古典文学の立場から漱石の俳句について検討を試みた。このコラムの内容が妥当かどうかはともかくとして、俳句や漢詩といった漱石の小説以外の文学、またそれらと彼が親しんだ漢詩文や英文学との関係など幅広い視点からの検討を行うことで、漱石の文学をより広く深く味わい、楽しむことができるのではないだろうか。